

学生の学習支援システムの構築Ⅲ

——保健所と連携した喫煙防止教育——

大川 尚子*・野谷 昌子**・鍵岡 正俊*
佐藤 秀子***・森川 英子***

Development of the support system for the studentsⅢ

——The smoking preventive education that cooperated with a public health center——

Naoko Okawa, Masako Notani, Masatoshi Kagioka
Hideko Sato and Hideko Morikawa

要約：われわれは保健所と連携して、学生が地域で開催されている健康教育活動（喫煙防止教育）に参加するプログラムを展開している。参加した学生は、健康教育活動と保健所や保健師の役割に関する理解が深まり、学校と保健所の連携や養護教諭と保健師の関係について理解できた。また、健康教育活動の実際は健康教育の授業体験であり、準備を含めて自信と関心を高める結果をもたらした。

体験学習は養護教諭という職業の重要性を認識することにつながり、免許取得や教員採用試験などの就職活動に積極的に取り組む変化が見られたことから、有意義な学習方法になることが示唆された。

Abstract : We are cooperating with a public health center to develop a program aimed at supporting student learning. This paper reviews the changes in students after they present a lesson on smoking prevention education in a primary school and a public health center. Students who participated in presenting this health education program understood more deeply the relationship between the school and the public health center, and also the role of the school nurse (“Yogo” teacher). The experience of giving lessons in health education made students recognize the importance of the occupation. In addition, the preparation as well as the presentation of a health education lesson increased students’ self-confidence and interest through a concrete health consultation activity.

As a result, this experiential learning had a positive influence on the students, as seen by their earning a license and taking the examination to become a school nurse (“Yogo” teacher). Providing such experiential study may become a significant means of supporting students’ education.

Key words : 養護教諭養成 school nurse (“Yogo” teacher) training 連携 cooperation 保健所 public health center 喫煙防止教育 smoking preventive education

*関西女子短期大学 助教授

**名古屋学芸大学ヒューマンケア学部 講師

***関西女子短期大学 教授

I はじめに

近年、不登校児童生徒の増加、いじめや学級崩壊などが教育現場の大きな問題となっており、養護教諭への期待も益々高まっている。

このように複雑、多様化している子どもの問題に関わるとき、一人の専門職種だけでは解決できない場合が多くなってきている。保健、医療、福祉、教育等それぞれの専門領域を超えて、チームアプローチにより関わる必要性が叫ばれている。そのため、養護教諭には、地域の様々な資源と連携して関わるコーディネート力が問われている¹⁾。

平成 8 年に公表された第 15 期中央教育審議会第一次答申²⁾において、「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方」として、21 世紀における「関係機関との連携」や「さまざまな専門家と教職員の連携」を強調し、学校・家庭・地域社会の役割と連携の重要性が提言されている。さらに小・中学校の学習指導要領^{3,4)}にも、開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど、家庭や地域社会との連携を深めることが挙げられている。

また、平成 9 年の保健体育審議会答申⁵⁾の「生涯にわたる心身の健康に関する教育・学習の充実」の中で「ヘルスプロモーションの理念に基づく健康の保持増進」と提唱され、ヘルスプロモーションの理念に基づいた健康教育が求められるようになった。

養護教諭は専門的な立場から健康上の問題を包括的かつ的確に把握し、学校として何ができるかを考え、ヘルスプロモーションの基本といえる「健康をコントロールし、改善しようとする力」を引き出す支援を行わなければならない⁶⁾。

本学ではこれまで、養護教諭養成課程においても他機関の役割や連携の方法等に関する学習機会をつくることは重要であると考え、適応指導教室等と連携をはかり、学生の学習システム

の構築を試みてきた^{7,8)}。

本研究では、保健所と連携して地域や小学校で喫煙防止教育を実施するという体験学習を試みた。

II 保健所との連携

本学学生に対し教育現場の問題においてどんな機関との連携が考えられるかについて調査を行った結果、最も回答の多かった保健所との連携を試みた。

1. 対象及び方法

①平成 16 年 6 月、本学学生を対象とし、地域の Y 保健所の保健師による保健所の業務や地域の小・中学校で行っている喫煙防止教育をテーマとした講演会を開催した。

②同年 9 月、地域の Y 保健所が開催している喫煙防止ボランティアの養成講座への参加希望者を募り、希望学生は 2 日間の養成講座に参加し、パネルシアター作成方法や指導方法等に関する指導を受けた。

③10 月、保健所が地域の小学生を対象に行っている喫煙防止教育に参加した。

④11 月、保健所が主催している Y 市健康展へ参加し、地域の住民に対して喫煙防止をテーマとしたパネルシアターを実施した。

⑤平成 17 年 7 月、K 市健康展でパネルシアターを実施した。

⑥同年 10 月、Y 市の小学校で喫煙防止教育を実施し、本学 1 年生全員が授業参観した。

⑦11 月、Y 市健康展でパネルシアターを実施した。

⑧平成 18 年 3 月、京都府 M 村の小学校で喫煙防止教育を実施した。

⑨同年 6 月、本学公開講座でパネルシアターを実施した。

⑩10 月、Y 市の小学校で喫煙防止教育を実施し、本学 1 年生全員が授業参観した。

⑪11 月に、Y 市健康展でパネルシアターを実施した。

表1 活動の概要

	内 容	開催時期	対 象	人数	開催場所
1	講演会	平成16年6月	1・2年生	70	関西女子短期大学
2	ボランティア養成講座	平成16年9月	希望者のみ	29	地域の保健所
3	喫煙防止教育	平成16年10月	希望者のみ	6	地域の小学校
4	健康展	平成16年11月	希望者のみ	18	地域の保健センター
5	健康展	平成17年7月	希望者のみ	67	地域の保健センター
6	喫煙防止教育	平成17年10月	2年希望者・1年生	58	地域の小学校
7	健康展	平成17年11月	希望者のみ	17	地域の保健センター
8	喫煙防止教育	平成18年3月	希望者のみ	8	小学校
9	公開講座	平成18年6月	希望者のみ	6	関西女子短期大学
10	喫煙防止教育	平成18年10月	2年希望者・1年生	58	地域の小学校
11	健康展	平成18年11月	希望者のみ	31	地域の保健センター

参加人数や開催場所は、表1に示した。

2. 結果及び考察

喫煙防止教育に関する講演後、参加者を対象に質問紙調査を行い、「養護教諭として働いた際、保健所と連携をはかりたいと思いますか」と質問したところ、「連携したい」が86%、「できれば連携したい」が14%であり、保健所への理解が深まったと評価できる。

地域の保健所の保健師による、「保健所の業務」や「地域の小学校で行っている喫煙防止教育」等に関する講演会では、「保健所との連携の重要性を学ぶことができた」「子どもへの新しい指導方法を見つけることができて良かった」「今回の講義で学んだことを将来、指導などで生かしていきたい」「保健所の方の日常の活動がよく分かり、連携の大切さを学んだ」等の感想がみられた。

喫煙防止ボランティアの養成講座を受講して、パネルシアターの作成方法や指導方法について学習した学生からは、「保健師や栄養士の職務について理解が深まった」「子どもに対して、どんな言葉づかいをしたらよいかがよく分かった」「養護教諭になったときにぜひ実践したいと思った」「指導方法などに関してもとてもよい学習機会となった」等の感想がみられ

た。

地域の健康展への参加し、パネルシアターを実演した学生からは、「保健所の活動が地域の方に伝わっているのを実感し、連携の大切さを学習することができた」「パネルシアターを実演し、子どもが一生懸命見てくれて、健康教育の影響力の大きさを実感した」「健康展で掲示されていた資料が、保健室でもすぐに使えるなもので参考になった」「他の専門職（栄養士等）の活動を見て、勉強になった」等の感想がみられた。

今回の体験学習を通して、学生が保健所や保健センターの役割や保健師と地域の学校との連携等について理解を深めることができたと考えられる。また、健康教育に対し、積極的な姿勢を育成することができた。

3. まとめ

学生の学習システムの構築を目指し、喫煙防止教育に関する活動を通して、保健所との連携を試みた。その結果、保健所や保健師等の職務に関する理解が深まり、現場に出た時に保健所との連携をはかりたいという学生が増えたことは評価できることだと考える。

Ⅲ 小学校における喫煙防止教育

平成 14 年度から新学習指導要領³⁾が本格実施され、体育科における保健領域（以下保健学習）では、小学校 3 年生より保健の授業を行うようになった。また、平成 10 年 6 月に「教育職員免許法の一部を改正する法律」⁹⁾が公布され、養護教諭が、保健の授業を担当する教諭又は講師となることが可能となった。

これに伴って、養護教諭が保健学習の授業を担当することができるようになり、養護教諭のもつ専門的な知識や技能を生かし、一層の効果を上げることが期待されている。

また、現在の教員採用試験では、課題があたえられ、その場で指導案を作って模擬授業をするといった内容が多く出題されている。これは、養護教諭が授業をすることに大きな期待が寄せられている証拠である。

養護教諭養成課程の学生に、積極的に授業を実施する能力を身につけさせる方法について検討した。

1. 対象及び方法

平成 17 年 10 月、大阪府 Y 市小学校 4 年生 113 名、平成 18 年 3 月、京都府 M 村小学校 1・3 年生 44 名を対象にして、学生 9 人が喫煙防止教育を実施した。授業には、パワーポイントを使ったクイズやパネルシアターを教材として使用した。授業前に 2 年生 78 名全員に授業の自信の有無とその理由について、授業後に参加学生 9 人を対象に、授業の自信の変化とその理由や、体験学習の効果について、質問紙調査を実施し分析した。

2. 結果及び考察

(1) 自信の有無

授業前に 2 年生 78 名全員（9 名を含む）に「授業をすることに自信がありますか」という質問したところ、表 2 のような結果が得られた。96% の学生が授業を行う自信がなく、そ

表 2 自信の有無別人数

※ () 内は%

	自信有	自信無	総数
全 学 生 (前)	3(4)	75(96)	78(100)
参加学生 (前)	0(0)	9(100)	9(100)
参加学生 (後)	6(67)	3(33)	9(100)

の理由として、「子どもの前で話すことに自信がない」「子どもの反応が想像できない」「知識的な面で不安」「子どもを授業に集中させることができるか不安」等があげられた。

参加学生は、授業前には全員自信がなかったが、授業後には 67% が自信ができたと回答した (表 2)。

自信ができた理由として、「大勢の人の前で何度も経験したこと」「子どもの反応がわかったこと」等があげられ、子どもの前で授業をするという体験学習は、大学での模擬授業では得られない効果があったと考えられる。

反面、授業後も自信がない理由として、「皆で計画して行ったので、一人でできるか不安」「もっと経験が必要」「喫煙防止以外は自信がない」等があげられた。

(2) 喫煙防止に関する知識

「低学年からの喫煙防止教育の必要性を感じた」「喫煙防止に対する意識が自分も高まった」「子どもの質問に答えられるように勉強した」等の回答より、授業の準備のために喫煙防止に関する知識が高まったと推察される。今後、他の教材でも授業できるように指導していきたい。

(3) 授業方法の習得

「子どもの興味を引きつける授業方法」「パネルシアターやパワーポイント等、視聴覚教材を使うことの効果」「対象学年によって言葉や内容を変更する重要性」「子どもの反応に応じた授業の組み立て」等の授業方法を習得できたという実感とともに、それが自信につながったことが推測できる。

(4) 体験学習の効果

体験学習の効果として、「自信をもって授業ができる」「人の前で話すことに役立っている」「引きつける授業ができるようになった」「子どもとの関わり方に役に立っている」「子どもたちの反応や理解度をみて指導内容を変える応用的な対応ができるようになった」「喫煙している生徒に詳しく個別指導できた」「健康教育が子どもたちのためになると思えるようになった」等があげられ、体験学習が学生にとって、また養護教諭になってからも効果があったことが明らかになった。

3. まとめ

授業を実施することに自信がなかった学生が、体験学習を通して、何度も子ども前で授業をすることで自信ができ、それが、養護教諭になったときに積極的に授業を実施する能力につながるということが示唆された。

Ⅳ 考 察

子どもの心とからだの健康づくりは、地域全体で継続的・有機的な連携のもとに行われることが効果的であるが、子ども保健行政は生まれてから就学するまでは母子保健法、児童福祉法に規定されており、厚生労働省の所管である。就学後は学校保健法のもとに文部科学省の所管となり、行政上の所管官庁が異なることによって、その間の情報交換が十分とはいえず、協同で事業に取り組むことはあまりみられなかった。必要な援助を効果的に継続させるためには、健康情報の一貫性が必要であり、地域において小児期からのライフサイクルに沿った健康づくり施策を推進するためには、他領域との連携が必要不可欠である¹⁰⁾。

平成14年度から実施された完全学校週五日制により、子どもたちは家庭や地域で過ごす時間が増えており、学校と地域社会との連携は一層重要となってきている。

岡本ら¹¹⁾は、養護教諭が地域保健と連携して

いる状況は、「感染症対策」「歯科保健」「喫煙防止」「栄養・食指導」「エイズ教育」の順で多かったが、養護教諭には、地域保健機関がどのような情報を提供できるかの理解が不足していると報告している。

津村ら¹⁰⁾によれば、地域保健と連携をとっている養護教諭は90.6%、であり、連携が必要だと思っている人は95.3%であった。連携先として、「近隣の学校」に次いで「教育委員会」「保健所」が挙げられた。連携している内容については、最も多いのは「喫煙防止教育」次いで「予防接種」「薬物乱用防止教育」であった。保健所と連携している養護教諭を免許所有別にみると、保健師の免許を所有している人はいない人に比べて有意に多かったと報告し、それは、養成機関における教育の中で、地域保健の位置付けがあまり高くなかったのではないかと危惧されると考察している。

看護師・保健師資格を持たない本学学生が養護教諭として現場にでたときに、保健所にはどんな職種の職員がいて、どんな業務をしているのかを知ることは大切であり、関係機関の専門性を理解していることが、積極的な連携につながると思う。

学生の学習システムの構築を目指し、喫煙防止教育に関する活動を通して、保健所との連携を試みた。その結果、保健所や保健師等の職務に関する理解が深まり、現場に出た時に保健所との連携をはかりたいという学生が増えたことは評価できることだと考える。今後、教育問題の複雑化とともに、機関と学校との連携の場も益々増加することが予想されるため、養護教諭養成課程における学習システムとしての様々な機関と連携をはかり、他機関への理解を深めていきたい。

21世紀を展望した教育改革の中で、保健体育審議会や教育職員養成審議会等において「養護教諭の新たな役割」や「養護教諭が保健の授業を担当できる」等が示され、それに伴って、教育職員免許法が一部改正され、養護教諭が保

健の教科の授業を担当することができる制度的措置がなされた。このことは養護教諭が健康の現代的課題や健康教育に積極的に関わることに大きな期待が寄せられているからである。このような状況のもと、校内の体制作り等、物理的な条件を整え、養護教諭の職務の特質を生かした保健の授業を担当していくことが大切である。

保健指導や保健学習の授業をするにあたり、養護教諭として、

- ①保健室での児童・生徒との体験を生かす。
- ②保健室での個別指導で養護教諭がとらえた課題や情報を授業に生かす。
- ③健康観察・健康診断結果等を活用する。
- ④保健室の機能を生かす。

ことを大切に、これら身近なことを授業に盛り込むことによって、児童・生徒がより一層適切な行動をとること、実践力を身につけることが可能になると考える。

これまでの養護教諭の仕事は保健室を訪れる児童生徒の疾病の対処や精神面のケアなど、二次予防に重点をおいてきた。しかし児童生徒の現状を考えると児童生徒を受容するとともに、健康な生活を送るために必要な知識や技術を習得させ、身近な健康問題を自分で判断し、処理できる能力を育てる一次予防にも力を入れていく必要がある¹²⁾。

本研究により、授業を実施することに自信がなかった学生が、体験学習を通して、何度も子どもの前で授業をすることで自信ができ、それが、養護教諭になったときに積極的に授業を実施する能力につながるということが示唆された。

また、授業参観した学生からは、「授業の仕方、児童への接し方・話しかけ方が理解できた」「先輩のようになるためにしっかり勉強しようと思う」「今は自信がないけど、いつか先輩のようになりたい」「養護教諭が行う保健指導の大切さを感じた」「養護教諭という仕事がやりがいがあると実感できた」「改めて養護教

諭になりたいと思った」「自分の目標である養護教諭になりたいという気持ちを思い出すことができた」等の感想がみられた。

バンデューラ (Bandura, 1995)¹³⁾の提唱する自己効力感に、①自己の成功経験、②代理的经验、③言語的説得、④生理的・情動的状态があり、今回の体験学習をこれにあてはめてみると、参加学生は、①自己の成功経験：「過去に同じか、または似たような行動をうまくやることができた経験があること、授業参観をした学生は、②代理的经验：「たとえ、自分はその行動はやった経験はなくても、人がうまくやるのを見て自分でもやれそうだと思うこと、を体験できた。

また、③言語的説得として、教員や友人のサポートにより、自分はその行動をうまくやる自信がそれほどなくても、人から「あなたならできる」と言われること、そして、学生自身が④生理的・情動的状态：その行動をすることで生理的状态や感情面で変化が起きること、によって自己効力感が高まったと推察された。

今後、ますます子どもの健康問題が複雑化すると考えられるが、子どもの心を支援できる養護教諭をめざして、自信を持って健康教育に取り組める養護教諭を養成するために、学習支援システムとして、学校現場に出向いて子どもの前で授業を行うという体験学習をこれからも継続していく必要がある。

また、自ら選んだ職業の重要性を認識することとなり、免許取得・教員採用試験への積極性に結びつき、学生にとって有意義な体験学習であったと考える。

VI まとめ

「学生の学習支援システムの構築」として子どもの心を支援できる養護教諭をめざし、喫煙防止教育に関する活動を通して、保健所との連携を試みた。その結果、保健所や保健師等の職務に関する理解が深まり、現場に出た時に保健所との連携をはかりたいという学生が増えたこ

とは評価できることだと考える。

また、授業を実施することに自信がなかった学生が、体験学習を通して、何度も子どもの前で授業をすることで自信ができ、それが、養護教諭になったときに積極的に授業を実施する能力につながるということが示唆された。

引用・参考文献

- 1) 山崎美貴子「地域社会の中で子どもの問題に対処するための連携とコーディネート」日本養護教諭教育学会誌 Vol 7, No. 1, 1-5, 2004
- 2) 中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」41 中央教育審議会 1996
- 3) 文部科学省「小学校学習指導要領解説総則編」平成16年3月
- 4) 文部科学省「中学校学習指導要領解説総則編」平成16年3月
- 5) 保健体育審議会答申「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」スポーツと健康 29(11) 50-93 1997
- 6) 福富敦子「保健教育における養護教諭の連携活動ー連携からコーディネートへー」日本養護教諭教育学会誌 Vol 7, No. 1, 12-16, 2004
- 7) 大川尚子他「学生の学習システムの構築ー子どもの心を支援できる養護教諭をめざしてー」関西女子短期大学紀要 第14号, 39-52, 2005
- 8) 大川尚子他「学生の学習システムの構築Ⅱー子どもの心を支援できる養護教諭をめざしてー」関西女子短期大学紀要 第15号, 13-20, 2006
- 9) 「教育職員免許法 免許状授与の特例 第16条の3」ポケット教育小六法 170 溪水社 2006
- 10) 津村直子他「学校保健と地域保健の連携にかんする研究ー特に養護教諭と保健師の連携についてー」北海道教育大学紀要（教育科学編）第55巻第1号, 249-256, 2004
- 11) 岡本啓子他「養護教諭と地域保健機関の連携に影響を及ぼす要因の検討」学校保健研究 48, 209-218, 2006
- 12) 盛加代子「考える力を育てる保健学習（実践報告）：養護教諭の特質・保健室の機能を生かして」金沢大学高等教育研究 54, 107-118, 2002
- 13) Bandura A : Self-efficacy : toward a unifying theory of behavioral change Psychological Review 84(2) : 191-215 1977
- 14) 矢野和佳乃「小学校における養護教諭の連携ー保健室登校児童との関わりからー」日本養護教諭教育学会誌 Vol 7, No. 1, 6-11, 2004
- 15) 赤木光子「これからの養護教諭に求められる連携のあり方」日本養護教諭教育学会誌 Vol 7, No. 1, 17-21, 2004
- 16) 出原喜代子他「保健室登校の連携に関する研究ー養護教諭の連携の相手と役割分担を中心にー」学校保健研究 47, 232-245, 2005
- 17) 小林央美他「健康教育に必要な養護教諭の能力に関する研究（第1報）ー養護教諭による健康教育の実践分析からー」日本養護教諭教育学会誌 Vol 7, No. 1, 52-62, 2004
- 18) 小林冽子「学校における保健管理と保健教育の結びつきについてー養護教諭の果たしている役割ー」千葉大学教育学部研究紀要Ⅰ教育科学編 46, 173-180, 1998
- 19) 佐光恵子「学校健康教育の推進者としての養護教諭の新たな役割」群馬パース学園短期大学紀要 5(1), 75-86, 2003
- 20) 笹嶋由美「北海道内中学校における養護教諭とスクールカウンセラーとの連携に関する実態調査」北海道大学紀要（教育科学編）第55巻第1号, 257-269, 2004

